触手ノ森 ——楠舞神夜、無限産卵——

その森に足を踏み入れたのは、単なる好奇心からだった。

「まあ、変わった形の木ですね……なんだか、蔓がうねうねと動いているように見えます」

宿場町の老人が「決して近づいてはならぬ」と警告した森。曰く、その奥には古の魔物の巣があり、入った者は二度と戻れない——そんな昔話だ。

楠舞神夜は、しかし、その手の話を聞くと居ても立ってもいられなくなる性分だった。

「分の悪い賭けの匂いがします。これはもう——乗っちゃうしかありませんね」

護式・斬冠刀を肩に担ぎ、いつもの薄い旅装束のまま——無論、下着は一切つけていない——彼女は深い森へと分け入った。

異変に気づいたのは、森の中心部に差し掛かったあたりだ。

「……空気が、甘い？」

まとわりつくような甘ったるい香りが、肺を満たす。それと同時に身体がじんわりと熱くなり、胸の奥がきゅうと疼いた。乳首が服の上からでもわかるほど硬く尖り、下着のない秘部にはじっとりと湿り気が滲み始めている。

「これは……なにか、おかしい……です……❤」

足元を、何かが這った。

見れば、地面から無数の蔓——いや、触手が伸びてきている。太さは指ほどの細いものから、腕ほどもある太いものまで。表面はぬらぬらと光沢を帯び、あの甘い香りを放つ粘液で濡れている。

「——楠舞一刀流、参ります！」

斬冠刀を抜き放ち、神夜は最初の触手を斬り払った。しかし、切り落とした端から新しい触手が生え、数を増していく。更には木々の幹から、地面の裂け目から、頭上からも——全方位から、無数の触手が彼女を包囲する。

「こ、これは……きりがない、です……っ！」

背後から足首を取られた。くるりと絡みつく触手が、ぐいっと彼女の片足を引く。

「あっ――！」

体勢を崩した一瞬を突かれ、手首にも、もう一方の足にも、腰にも――次々と触手が巻きつく。斬冠刀を取り落とし、花札に手を伸ばすより先に、両腕は頭上に引き上げられていた。

「は、離し――んぅ……っ」

口元にも細い触手が這い寄り、唇をこじ開けるようにして侵入してくる。甘い粘液が舌の上に広がり、それが喉を伝って体内に流れ込んだ。

（あ、これ――）

瞬間、全身の力が抜けた。霊力が、抵抗の意思が、粘液と共に溶かされていく。それと引き換えに、身体の奥底から得体の知れない熱が湧き上がり、四肢の先まで痺れるような快感が走り抜ける。

「……ぁ……なに、これ……❤」

口から触手が抜かれる。しかし、既に彼女の身体は自由を失っていた。触手に吊り上げられ、大の字に四肢を広げられた格好で、地面から浮かび上がる。

そして――触手たちが、一斉に彼女の衣装に絡みついた。

びり、びりり――と布が裂かれる音。楠舞家の旅装束が、触手の群れによって無造作に引き千切られていく。胸元を覆う布がはだけられ、128センチの爆乳がぶるんと露わになった。腰布も剥ぎ取られ、下着のない秘部が森の湿った空気に晒される。

「あ……服が、全部……こんな、丸裸にされてしまいました……❤」

それなのに――いや、だからこそ。

見られている。剥き出しにされている。無数の触手という名の目に、自分の裸身の隅々まで見られ、舐められようとしている。その状況が、露出狂の彼女には抗いがたい快感を生み出していた。

「こんなに、いっぱいに見られて……❤ 私、恥ずかしいのに、身体が熱く……❤」

触手による「検分」は、すぐに始まった。

まずは乳房。四本の触手が左右の爆乳に絡みつき、根元からぎゅうぎゅうと締め上げる。128センチの肉塊は更に膨れ上がり、皮膚が薄く透けるほど緊迫した。

「あ、ぁ……❤ きつ、い……お胸、破裂しちゃ……でも、これ……❤」

更に細い触手が、乳首に吸い付いた。先端に小さな口のような吸盤があり、それが乳首をちゅうちゅうと吸い上げながら、内部の小さな突起で乳輪をくすぐる。

「ひゃぁ……っ！❤ 乳首、吸われて……なか、ちくちくするので、こすられて……あ、あ、あぁ……❤」

吸盤触手が交互に、時には同時に左右の乳首を吸い上げる。その度に神夜の背筋は弓なりにしなり、吊られた身体が空中でびくびくと跳ねた。母乳は出ていないはずだった——なのに、触手の刺激が強すぎて、乳首からは透き通った雫が滲み始めている。

「や、だめ、まだ母乳なんて出ないはずなのに……あ、ぁ……❤ 勝手に、分泌されて……❤」

次に、下半身への触手が動き出した。二本の触手が左右の足首を掴み、更に大きく開脚させる。下着のない秘部が、完全に無防備な状態で曝け出された。

ぬるり——と、一本の触手が太腿の内側を這い上がってくる。甘い粘液を塗りつけながら、それはゆっくりと、まるで焦らすように、太腿の付け根をなぞった。

「ん……❤ そこ、やわらかい……あ、もっと上の方、来て……あ、いえ、来なくていい、です……❤」

自分の言葉が矛盾していることを、神夜は自覚していた。拒否しながら求めている。この触手は——この状況は——彼女の淫乱な本性を、否応なく暴き出していく。

触手が、秘裂に到達した。先端は尖っておらず、丸みを帯びている。それが、花弁を優しく押し広げるようにして、ぬるぬると表面を這い回った。

「あぁ……❤ もう、こんなに濡れて……❤ 恥ずかしい、のに、自分でわかるほど、蜜が……❤」

触手が、蜜で濡れそぼる入り口に狙いを定める。そして——

ずぶり。

「——ッ❤❤」

膣内に触手が侵入した。人の男根とは全く違う——一定の太さを保たず、うねうねと形を変えながら、彼女の内壁を押し広げていく。その表面には無数の小さな吸盤がついており、それが内壁の襞一枚一枚に吸い付いては離れる。

「あ、あ、あ、あぁ……❤ なに、これ、なに……❤ 吸盤が、中で、いっぱい吸い付いて……あ、奥、もっと奥に……❤」

触手は子宮の入り口まで到達し——そこで止まった。かわりに、第二の触手が近づく。それは一回り細く、先端が更に細かく分岐している。それが、膣に埋まった触手の脇から、尿道へと侵入してきた。

「ひ、そっちは、おしっこの穴……あ、入って……❤ 細かい先が、中で広がって……あぁああっ❤❤」

尿道と膣。二つの穴を同時に触手で満たされ、神夜は目の裏で星が弾けるほどの快感に襲われた。人の男では決して届かない場所、決して与えられない刺激が、彼女の身体を容赦なく責め立てる。

「あ、あ、あ、あ……❤ すご、これ、動かれたら私——」

動かれた。

膣内の触手が、ぐちゅぐちゅと抽き差しを始める。尿道の触手も、連動して細かく振動しながら出入りする。更に、今まで彼女を舐め回すだけだった触手が——肛門に狙いを定めた。

「あ……っ！ そ、そこは、まだ——」

ずぶり。

「——んぅううううっ❤❤❤❤」

三穴同時。膣、尿道、そして肛門。すべての穴を触手で塞がれ、埋め尽くされ、同時に責め立てられる。その圧倒的な充填感と、内部から吸い付く無数の吸盤の刺激に、神夜はあっけなく最初の絶頂を迎えた。

「イ、イッて——あ、あぁあああああっ❤❤❤」

内壁が激しく痙攣し、三本の触手をぎゅうぎゅうと締め付ける。尿道からは耐えきれずに潮が噴き出し、膣からは蜜がどくどくと溢れた。爆乳が大きく跳ね、乳首からも雫が散る。

絶頂の中、彼女はぼんやりと思った。

（これ——まだ、始まりだ）

その予感は、正しかった。

「快楽改造」は、絶頂の直後から本格的に始まった。

触手の粘液には、人間の身体を変質させる成分が含まれていた。体内に注入された粘液が、子宮に、卵巣に、乳腺に、神経細胞の一つ一つに浸透していく。

最初の変化は、乳房だった。

「あ……お胸が、熱い……なんだか、張って……は、ぁ……❤」

128センチだった爆乳が、更に膨張を始める。触手が巻きついたまま、それでも肉はむくむくと肥大し、乳輪も一回り大きく、乳首もぷっくりと膨れ上がっていく。そして——

「あ……❤ 出る……お乳、出てしま……❤」

乳首から、真っ白な母乳が迸った。まだ妊娠もしていないのに——いや、触手の粘液が乳腺を直接活性化させたのだ。ぴゅうぴゅうと勢いよく吹き出す母乳を、待ち構えていた触手が嬉しそうに吸い上げる。

「あ、あぁ……❤ 吸われる、私のお乳、絞られて……❤ 出すぎて、止まらなくて……でも、気持ちいい……❤」

次に変化が起きたのは、子宮だった。

腹の奥がじんわりと熱を帯び、何かが育つような——そんな感覚。膣内の触手が、今度は子宮口をこじ開け、直接子宮の中へと侵入してくる。

「あ……っ！ 子宮、子宮の中にまで……あ、何か、注入されて……❤」

触手の先端が膨らみ、どくどくと熱い液体を子宮に注ぎ込む。それは精子ではない——触手の「種」だ。人間の卵子と交わるためのものではなく、触手自身の幼生を彼女の胎内で育てるための苗床化液だった。

注入が終わると、触手は子宮から抜け、かわりに別の種類の触手が近づく。これは産卵用の触手——先端の開口部から、小さな卵のようなものを次々と産み落とすための器官だ。

「まさか……私、これから……出産、するんです……？」

答えはすぐにやってきた。

腹の中が、ぐるると蠢く。注入された苗床化液の作用で、彼女の卵巣からは人間の何倍もの速度で卵子が排出され、それが触手の幼生と結びついて——小さな卵を形成していく。

一時間も経たないうちに、神夜の腹は妊娠八ヶ月のように大きく膨れ上がっていた。

「あ、あ、あ……❤ お腹、こんなに……中で、何か、いっぱい動いて……❤」

胎内で無数の小さな何かが蠢く感覚。それが痛みではなく快感として伝わるよう、彼女の神経は既に書き換えられている。腹の中で動くたび、内壁がこすれるたび、彼女は小さく絶頂を繰り返した。

「産む、です……？ 私、これを、産むんです……？ は、ぁ……❤」

答えは——産卵管触手だった。それが彼女の膣に挿入され、子宮口まで到達する。そして、子宮内の卵を一つずつ吸い上げ、体外へと運び出す。

「——んぅううううっ❤❤❤」

最初の一つの卵が、産道を通って押し出される感覚。卵は鶏卵ほどの大きさで、半透明の殻の中に小さな触手の幼生が透けて見えた。それが、ぬるりと秘裂から零れ落ちる。

「あ、で、出ました……❤ 産まれました……これ、私の子……触手の、私と触手の……❤」

産卵の快感は、人間の出産とは比較にならなかった。卵が産道を通過するたびに、内壁の無数の吸盤が刺激され、彼女は絶頂に突き上げられる。しかも卵は一つではない——続けて二つ、三つ、四つ……際限なく、胎内から溢れ出てくる。

「あっ、また、産まれ……あ、あ、あ……❤❤❤ これ、とまらな……産み続けて……❤」

十、二十、五十——数えるのも無意味なほど、神夜は卵を産み落とし続けた。その間も乳房からは母乳が噴き出し、触手がそれを吸い上げる。口には甘い粘液を供給する触手が差し込まれ、栄養と同時に更なる催淫物質が注ぎ込まれる。肛門では別の触手が這い回り、時折産卵のリズムに合わせて出し入れされる。

完全な「苗床」だった。

触手に吊るされ、無数の卵を産み落とし、母乳を絞られ、口から栄養を与えられ、排泄さえも触手に管理される——人間としての尊厳も、姫としての誇りも、すべて剥奪された、純粋な生殖器官としての生活。

それでも。

「あ、あぁ……❤ 私、今、こんなに幸福で……❤ 産むのが、気持ちよくて……卵、私の子が、出てくるたびにイッてしまって……❤」

改造された身体は、もはや産卵そのものを最大の快楽として受け入れていた。抵抗の意思はとうの昔に溶け、彼女は自ら腰をくねらせて、触手の産卵を促す動きさえ見せ始めている。

「もっと……まだ、お腹の中にいます……❤ もっと産みたい……私の子、触手の子、全部産ませてください……❤」

その言葉に応えるように、触手がより深く子宮へと潜り込み、新たな卵を送り込む。終わりのない産卵の輪廻——楠舞神夜は、触手の森の中で「無限の苗床」へと変貌を遂げつつあった。

（それから——どれほどの時が経ったのだろう）

外の世界では、ひと月が過ぎていた。

森の異変に気づいた里の者たちが、腕の立つ祈祷師を雇い、触手の巣に封印の札を貼ったのだ。触手の動きが弱まり、巣全体が縮小していく。その過程で、彼らは見た——森の中心で、無数の卵に埋もれて横たわる、一人の裸の女を。

「……楠舞神夜、です。助けに……来てくれたんですか？」

彼女はゆっくりと起き上がった。その身体はすっかり変わり果てていた。128センチだった爆乳は更に肥大し、乳首からはとめどなく母乳が滴っている。腹はまだほんのりと膨らみ、太腿の間からはとろりと卵の残滓が零れ落ちた。

「ひと月も……そうですか、そんなに。私はずっと、ここで、卵を産んで……」

彼女は、うっとりと目を細めた。

「……極まりない日々でした❤」

彼女の周囲には、産み落とされた卵が小山のように積もっている。その数——優に数千は下らない。それらは封印の影響で活動を停止しており、もう孵化することはない。しかし——もし封印がもう少し遅ければ、森は触手の幼生で溢れていただろう。

祈祷師たちが差し出す布を受け取り、彼女はようやく裸身を隠した。といっても、その布一枚では爆乳も太腿もほとんど隠れていないのだが——当の神夜は全く気にしていなかった。

「ふぅ……」

彼女は立ち上がると、地面に落ちていた護式・斬冠刀を拾い上げた。ずっと手放していたというのに、不思議と手に馴染む。

「それでは、この森とはお別れですね。……ああ、でも」

彼女は振り返り、動かなくなった触手の巣を見つめた。

「私をここまで変えてくれたこと、感謝しています。あなたたちのおかげで、私は知ってしまいました。産むことの喜び。苗床になる悦び。何千もの子を生み出す、この身体の可能性を——」

それから、里の者たちに深く一礼する。

「皆様にも感謝を。助けていただいて、ありがとうございます。では、私はこれで——また旅に戻りますね」

「え、ちょっと……あなた、その身体で……？」

老婆が心配そうに歩み寄る。母乳の滴りは止まらず、腹の中にはまだ卵が残っている。明らかに普通の状態ではない。

しかし、神夜はいつもの天然の微笑を浮かべるだけだった。

「大丈夫です。これはこれで、新しい私ですから」

そして、歩き出す。

「それに——次の町では、新しいお乳が売り物になるかもしれません。路銀も心許ないですし、母乳も出し惜しみはできませんから。見聞が広まること極まりないです❤」

改造され尽くした身体で、それでも彼女は前を向く。触手に苗床にされ、無数の子を産み落とし、それでも——それすらも「旅の見聞」として受け入れてしまう。

それが、楠舞神夜という女だった。

森を抜け、峠を越え、次の町へ向かう彼女の背中を、夕日が赤く染めていた。

歩くたびに爆乳が揺れ、母乳が滴り、それでも彼女は笑っている。その腹の奥で——もしかしたら、最後の一つがまだ、動いているのかもしれない。

（つづく）